



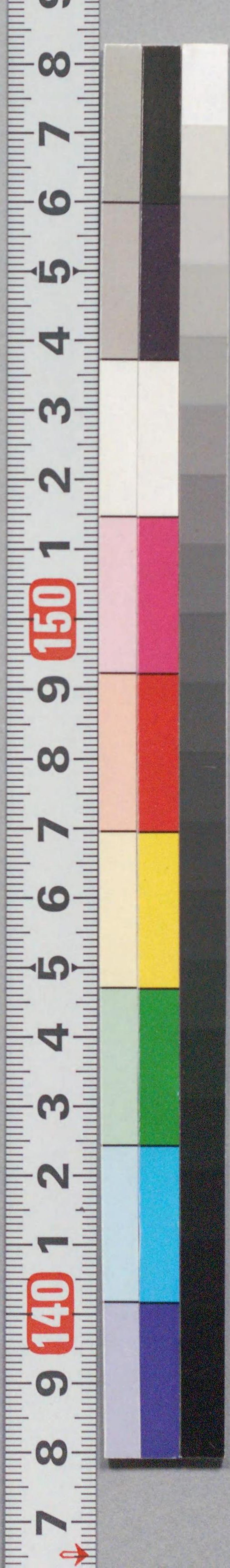
国立国会図書館 街能傳 4卷 208-93

208
4
93

浪花
街通傳

浪花街通傳

秋



ガラス使用

街能噺 卷之三

江戸前乃隠士 平亭銀鷄撰



浪花なる噴慶所の夜見世のにぎをい高麗土居
土いざあはに我日の本の君が代小かる目出さ
夜の景繁花と極めありさぬへ餘國小あま
あまづらび商人の燈火の天小かやき街の提灯
星うとうさぶ茶屋の樓上小酒客あれせんさいの



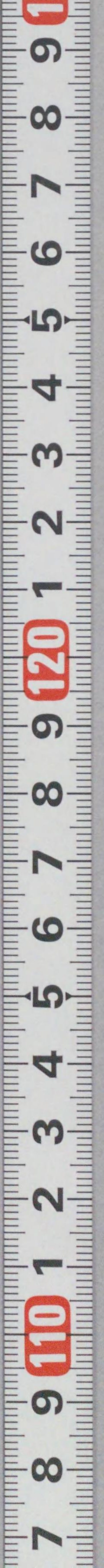
街能噺 卷之三

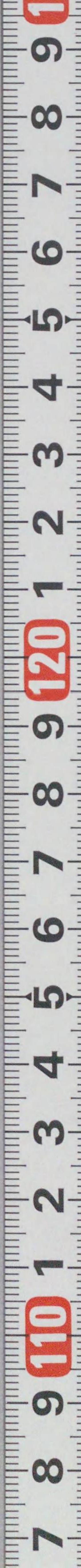
見世小餅喰ひあり。願かろの侍鮓とつほめ。前坐の町人揚物とやらす。魚屋買人ととりて。鯛やう小賣つくとすれば八百屋の丁稚葱れも買はず。行われれば歸るありとあれが行ありて。其賑やうなまそ。譬ふ物な。されば万松千長の二安も鶴人おそく。なうされ初めて夜見世のありとぬと孰火賢見て大い感ト。三人うちつれ家おろろくれ。女房おやくお早う。お早うと。私の敷へでもおいでと。思ふておほしと。

鶴人おれも敷で二盃上やうとおもつて出かけ。先生がさか何分モウ飲ぬら。ゆりて来ると有と。今夜の飯り中。明日の銀雞さんをさういつてもちて昼過る敷といふ志おれおまや正。こたさも朝のうち髪と結せと置て比白さぬの。内供とすうぐい。女房まやアうれおほす。久しうて出うけらさうい。芝居もちよと見はま。万松 たいアうりて大醉でうりヤス御新造さぬ。

町能噂三之巻

三





内茶と一ツ願ねがひとふたりやス。となく多おほむがで来くるやう
 でたりやす。女房ハいく只今茶ちやく一ツ入いてあげは
 志しよ。千長万松さん沖新造しんぞうさぬ江戶言ことばよお家
 さんといいく貫ぬかひとぬ。万松早はやづく思おもれ入いり。
鶴人コレサ成田屋なりだやの処ところくれと友白髪ともしろがみと入いり。
女房わがぢいアアアア鶴つるの屋やさんへお上ありなさいとぢや
 おません。鶴人わんふさううづづけな。おやきふ多おほむ
 中ちゆうく。すんかから白折しろまりり鷹たか鳥とりの尻しりとつれははッッソソテ

子この其花月堂きかげだうの丁子風呂ぢゆうふうりよががい。煉羊羔大も
 ばどばりり中ちゆうとせの。万松イヤお菓子かしハ何なにももいいりや
 へん。お茶ちやと頂つゝきなながが。浦うらさおお嘸まととててけけやや正ま然ぜん
 心こころ生ひ昼ひるももお責せめつけつけ中ちゆうとてとちちとおおよよららるるもも志しれ
 へん。鶴人いいく内うちははなないい終しゆう日にち終しゆう夜やでも退たい屈くつ
 ぬぬの流儀りゆうぎででたりたりややス。千長叔先生おぢせんせい順慶じゆんけい丁ぢゆうへへななががか
 し賑にぎななことことででたりたりややス。丸小江戸まるせうえどの浅草市あさくさしといいふ
 ものものででたりたりやすぬ。大壮たいさうなな人ひとででたりたりやすかか毎晩まいばんちちの

街能噂 三巻

三

一

通りでわろやオクね。鶴人さやうさ。毎晩の通り
 じりやス。順慶町をわろやア右やせん。心齋橋
 筋の清水町のへんも。毎晩の通りでわろやス。毎
 度へ夜も九ツ頃迄郡集。こさうでわろやスガ。今で
 は五ツかぎり小列て仕舞やス。万松何といふをな
 小夜見世持出とて賣のてわろやス子。鶴人さや
 う。喰ひ物も出れば袋物大小類古道具迄も出
 やス。[千長]江戸でも近年浅草御附。両國橋

の間や。堺町辺。人形町のわろや。ちやから
 見世が見えやス。われも大坂の夜見世。こ
 つでわろや正。[万松]さやう。何の邊小餘程
 何り高ひも能くあるといふことてわろやス。[鶴人]イヤ
 新丁橋の上。長命丸とて賣て居中。こがおき
 つきや。こ。接摩の上見世が直小涼室
 でわろやス。[千長]なるかどく。長命丸と見
 中。さうも字と白くぬ。行燈でわろや

街能噂三之巻

四

外わ小のも大ぶ分ぶん橋はしの上の小の商人あきんどが見みえ申まをす。鶴つる入い夏なつの橋はしの上の小の大ぶ壯さう見み世よと出でヤス。それも天てん科か商あき小のひでなく。居ゐ酒さけ見み世よなとがわろやすす。橋はしの中なかがせまくなつて困こまりヤス。五ご松しょう橋はしの上の商あき人んどの江戸えど小のへとんと無なこととわろやすすね。千せん長ちやう江戸えどで橋はしの上の小の居ゐ商人あきんどへはなす。亀かめはなす。鰻うなぎと賣う買かひのと浅草あさくさ海苔のりとわろのと金かねの耳みみ搔かが一本いっぴん四よ文ぶんといふやつと。紙かみ代しろ板いた行ぎやう代しろが唯ただの四よ文ぶんといふ大小おほし柱しら曆りきと賣う買かひの小こ限かぎる

位くらでわりヤ正ただ。万まん松しょう暮くれうう正月しょうげつへはいて串くわい柄がらと紙かみと包つつんで水みづ引ひとわろ。上のと書かて。賣う買かひが折ちぢ橋はしの上の小の出でて居ゐやす。千せん長ちやうかろわど串くわい柄がらと見みわける。とがわろやす。中なかく大おほ坂さかのやう小こ屋や臺たい見み世よと出で。腰こし掛かけ臺たいと置おく。さうする。けいふの糸いとやせん。イヤ橋はしの上ので六むつとといふ日本にほん橋はしでわりヤ正ただ朝あさ市いちかといふ八百やっ屋や。さうな屋やの類るいい。何なにとわろ。ヤス。と直ちやう小こ棒ぼうつとが出でて追おひ拂はらって中なかく一寸いっすんも置お置おせや

人 鶴人 さやうく 朝通ッて見やすと 棒つさぐ 居

やす。われと 処の者へ 鬼といひやすせん。 万松 時よ

先生まごゑひぐ 醒やせん 水とッ 盃頂戴のーや 正

といひながらうごんぶら 鶴人 ヤレさううまやめほし。 今上ますよ

コナ先生小ぶと上さッせん。 女房 はんく 只今直又上

はすさうい。るちあうへお出なさうはし。 万松 イへく

おうはいんごうりますすな。私の大酔後の水瓶と首引

てりやスうら。十分小つとまきます。サアくあわうさうら

らへいらの志中りはし。 女房 なつひソレ衣類へ水がかつて

はすモシ。 千長 万松さんごよしこのご。又例の水うといひ

これも傍 鶴人 コレ皆さぬごふいふのどサアくこちへく。

王長 イや先生此間も脇で見やしご。モシ大坂の空電

ハ誠小きねいごりやス子。此内のももんごいひ恰好

ご江戸とい大ちがひでありやス。 鶴人 さやうと空電大

坂の方が焼いひやうごりやス。 鍋釜を掛る穴いけお

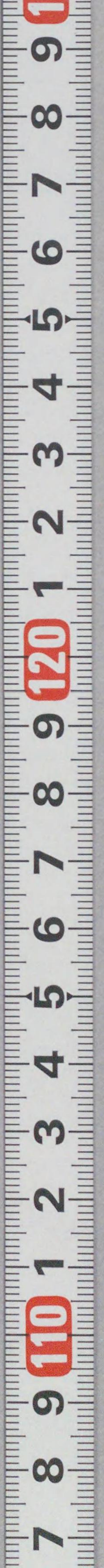
丸く。うらぬく。といふあめでりやスうら。火と氣も肉へ十



分小籠ぶんこりたご新あたらも大氣おほき小儉約けんやく小なり其その上うへは早く
煮かこちやすこれソこテ是こ神かみ見みトや竈かまど小灰こはいといふ
めいよ少すこもたいく一度いちどく小取ことりやす下したは此こ通と瓦わでや
やす其その上うへ小竈こかまどのく蓋あふとあめてやすいろろ火ひの用もち
心こゝろも善よ々々やすたたいなが見みせると千長かろうやど是い
奇妙きせうと方松さん一才は既見みトや「方松水みづと四五ごとい
これの思おもひつききモシ先生せんせい大坂おさかの竈小こは新懸けと
いふものがらるやアらうやせんう大坂おさかの風どとつつて

江戸えどでも近頃鐵てつで拵へのと瓦で焼とのと二通と
と賣やす千長さやうく上野うのの山下した小軒こけんわらやす
セいソレ草履くさり拵もちへて居ゐるうちで「鶴人ひとさういふ吏しで
わらやす江戸で新懸けと賣といふとと聞申まといふ
然し一い大坂おさかの竈小こはのこらば有といふ訣がやア
わらやせん有家ありもわらう無ない家も有やす私のうち
杯たまぶは新懸けへ用ひやせんなれもわられへ用ひる
方か利り方かでわらやす格別くわくべつ新あたらと燃小こ焼やうわらやす

街能噂



モ其処そこ小形の火消ひけし壺つがと沖つら見トヤ。江戸のうりの
 餘程よほど雅みやびでうりヤ正。[万松] そをへうり。おとどなるやどこれ
 の雅みやびでうりヤス。坐右まゝの置おて書翰しよかんとお込おたど小の
 ぶつものいヤせん。[鶴人] まごやうと外まの四角しやうかくなもうりヤスゼン。
 [千長] ちやうぢやうモ此魚板このいさなも江戸のうり足あしがらひあやすせい。
 江戸でかういふ足あしとつらもの料理場りやうりやの大俎おほなまはは
 かぎうりやす。[鶴人] たろかどとやうく。モ其火か
 口くち相あも沖見トヤ。江戸より四角しやうかくでうりヤ正。

持もて鑪ろもらいいと石いしも角色かくしきでうりヤス。[万松] なる
 わど大同たいどう小異せういでうりやすねい。然しかし江戸でも近ちか
 頃ころハ此角色このかくしきの石いしが流行りやうこうひひやすよ。文政ぶんせいの中
 頃ころ迄まで専せんらうりヤし。真白まはくな火ひお石いしよりハ。此方このあたが
 火かが出るでといふとでうりヤス。[鶴人] たろかどとやうか
 も知しれやせん。火口かぐちも大坂おおさかでハ旅火口りよびかぐちでうりヤス。江戸
 のやうな麻あし殻かやもろこし殻かハ用もちひやせん。[千長] ちやうぢやう
 へ引ひ持もれでハ鑪ろも微ちひさくて間小まがせ合あヤス。ぶつかりで

街能噂 三巻

七

火口箱かくらたこも小ぶりで夕やス。アモシ黒い徳利とくりを何

焼やで夕やス。鶴人つるびとアが大坂の負がん多徳利とくりで夕やス。

酒屋より日酒と入てよこす徳利とくりを負がん多徳利とくりといひやせり。江戸のよりの餘よ

やとまぢれておりやス。万松まんしょう徳利とくりと多たなうかどコシハ

雅みやびど。モシちよのと。花はなと生うるなご小も志しぢれて居ゐ

やス。鶴人つるびとコレが大坂のぬきついで夕やス。かんなくづ

よりの遙とほよう夕やス。松の木まつぎの根ねとさうで夕やス。か

これとヒデといひやス。千長せんちやうマ列り己おのれハ強い脂あぶらで夕やス。

是こゝでハ直ちか小こ火かがうつうや正ただモシヒデといひよ訣くで

けりやス子こイ。鶴人つるびと鮮あまらぬとせけりやすが。火かが直ちか

小こ付づて燃もる木きゆゑ火か出でるといふと小こて火か出でるといふ

うも知しやせん。千長せんちやうなるやどお説せつの通とほうで夕や正ただ。

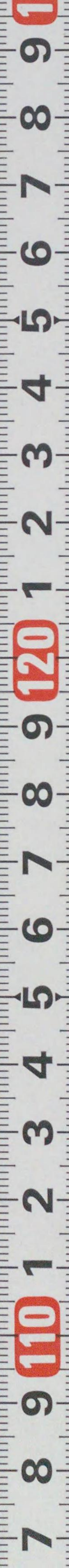
女房にようばうサア比ひ目めとぬこちり人ひとお出でたうさうはせ。めんな

けりやうも何なにでおはすきこなる処ところ小こ鶴人つるびとかん小こ

おはたし小こううれて。甚とほ処ところおちつき中なかと多たく

此地このちへ。万松まんしょうまきへア水みづで少すこく酔よがうあや

行北野三巻



と鶴人 イヤ水が汲置で悪クヤ正。モシ大坂も善文
 ぶが水水の少困困りヤス。皆皆な買水買水でクヤス。万松
 へ引堀井戸井戸ハクヤせんね。鶴人 有有まハクヤ
 すが泥泥ググて飲水飲水ハ悪悪クヤス。皆皆お
 川水川水と買買て飲飲ヤス。千長 江戸の両國辺両國辺といふ物で
 クヤス子。鶴人 大大氣氣小小と申申でクヤス。女房 縁縁と
 縁縁臺臺ハイ茶茶くくが出来出来ははと。万松 へへくく六六憚憚り
 モシお土瓶土瓶と是是へへととははし。鶴人 土瓶土瓶と菓菓

子子簞簞筍筍と是是へへ出出ささツツせせぬ。女房 へへくく。万松 イヤ其臺其臺
 所所のおおははななくくで思思ひひ出出ししややとと。世間途世間途中中で
 見見ううけけ申申とと。新新と大大壯壯貫貫目目小小掛掛て居居申申とと。ガ
 何何れれハハどどふふすするのでクヤス子。鶴人 大坂大坂ででハ江戸江戸と
 ちちががツツてて新新と目目小小掛掛くく賣賣ヤス。二十貫二十貫目目と一掛一掛と
 志志申申と。上上新新でで五百五百文文よりより五百五百五十五十位位雜雜木木でで四
 百百よりより四百四百五十五十文文位位でクヤス。千長 へへ引引それそれででハ江
 戸戸のの中中よりより小小壹壹分分小小袋袋束束といいふふ訣訣ででハハククヤヤせんね。

街能噂 三巻

若氣が寄合て生海鼠と糸で結いて五六人對の風
俗などして鉦や太鼓とあきながら土龍の宿
り。生海鼠殿のお見舞やと。雛子ながら往來
と歩きやス誠小古風な物でうりやス常小いたるはこ
といひやすが此晩ふからうてんころごの御見舞
といひやす。然し今でいなもな小只歩かや
すでうりやス。いひふやごになは御方の内家小かや
いふ御例もゆるゆるけあやうや。久しい跡は

上州七日市遠へいさ中々とき農人が寄合々畑
中と何のいひながらあいて歩き中々こと見や
と。跡でまけもやのり土龍もらの跡はなはご
といふとでうりやス。我うて江戸でいびぐらあらといひ
やス。大坂でうりやス。ちもちといひやス。千長をめて承り
や。夫やア奇妙なまごでうりやス子。万松ソ六何ぞ
談のうりやス。鶴人さやうと別のまけの
うりやせんが。さうすると土龍が庭のおとあげぬと

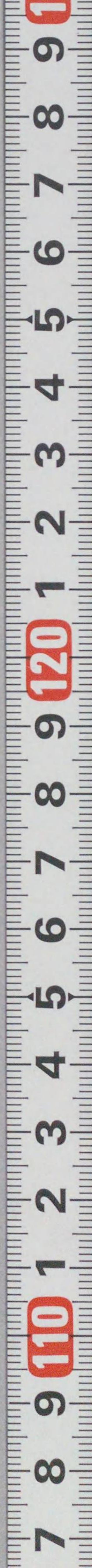
街能噂 三巻

十二

往命四三

いふまでわたりやス。モシ中ほど江戸小無ことぞわたりやスせん。
 正月二日か銭湯の初よりて是と初湯と唱やス。元日
 の夜より火と焼初めて。明七頃小なりやすと湯
 屋の若者が四五人位づ對の風俗とぞり。又も
 其湯屋の下の半てんたんと着やして提燈と下
 銅盥とあきき竹と吹ながら市中と沸と沸と大聲
 と上て觸て歩きやすがコヤヤとんと陽氣で勇しい
 ものでわりやす。[万松] 今珍敷ことぞわりやす。なるやと

お説の通り。コヤヤ陽氣でわりや正。[鶴人] 元日の夜新
 町の禿や子供も。おや方のあつと。何方中へ遊びま
 出やすが。夜が明ると皆な引込やす。いちくな丁
 燈など下で中く殊勝な物でわりやス。[千長] ハテ
 いちく替のことがあるものでわりやス。伊先生正
 月の重誥小海山とつものごとがわりやアツやせんり。
 どのふ訣でわりやすぬ。[鶴人] 小海といふ魚類の
 重誥又山とつものぞ精進の重誥とのとでわり



大坂銭湯二而正月二日初湯乎市中圖



持筒

さし

さし 梅川 五

往乃樽三之卷

大坂銭湯二而正月二日初湯乎市中

十四上



米人

松の戸の松うら

明や今朝の雲

竹人

日のくまのまひ

つらねと雲は月

梅の花ちのさるる

春のもよ

九関

花頂

初冬風や湯屋へ

うらさる梅の花

里居

梅花をゆれり

空の戸はう都

春枝

飛風はもや風の

うらさる木若の宿

枕江

若あはるう門

里の光るうら

さくらも湯屋のそと

候式うら

霞月

馬宿

法標の音も風

さくら切初湯うら

其樂

初湯うら

さくらや梅の葉

ヤス助紙も海の箸。山の筋と書分て置やす。

〔万松〕海山の訣がゆく知や。是やモモ面白

仕来てりやす。御出家方が羊頭小来れときも。

さう分ておさやすと。大氣小やんやでりやすね。

〔千長〕箸紙と別く小志て置置のゴ一寸志とゆいごつ

格でありやすよ。〔万松〕さうとモモ那分の晩小

厄拂や太神樂へ来やすね。〔鶴人〕厄拂ハ江戸の通

小来やす。太神樂へりやす人。〔千長〕イヤモモ先生

急ぐ訣がアアアヤせんが秋小なりやすと。私の懇

意な立兆といふ画工が。上坂のやすが。とより

河近処小鳥渡。賣居りやすめい。〔鶴人〕

有や正とも。此先小も一軒心當りがりやす。六

が一間小。八むが一間。二の玄関様体が有てそれ

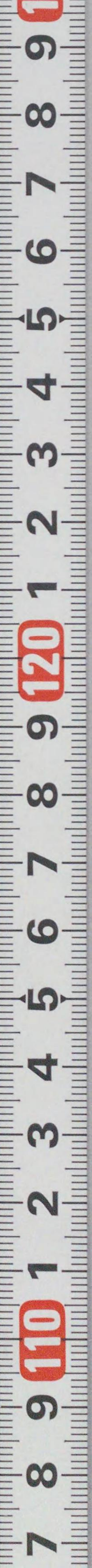
小勝手でりやす。〔千長〕ソリヤ奇妙下度おつて付て

りやす。何程のめりやす正。〔鶴人〕賣家小へい

やすめい。ソリヤそれで貸のでりやすが。合小三分

街能噂三巻

一五



御能噺三巻

十一

位なまごで有りや正。千長考して合いふいふいふいの訣けで有り
 やス。鶴人これなるやど是いの御存ごぞんありやスめ。江戸と違ちがつ
 て大坂での店賃とちやんの限かぎらぬ惣なでの勘定かひが二月目の
 拂はらひで有りやス。江戸は月つき々の勘定かひでありやすが大坂
 の六十日の貸借かいくでありやすゆゑ。合あひあひあひあの三分さんぶんといひ
 やす。二月の正せいで有りやス。二月の正せいを分ぶん二朱しゆの
 付つやす。五長ごちやうそのい安やすい物もので有りやス。ごまぞ其そのれが
 塞ふさががず小居こゑははよろよろううううやすが。鶴人その其外その外ほかももほほご

何程い程ちやうもも有りや正。万松まんそう大坂おおさかでも引越ひきこのときの近きん延えん
 蕎麥そばと配くりやス。ね。鶴人つるも江戸えどの蕎麥そばとく
 かりやすが大坂おおさかでの附木つけぎと二把にづづ賊くりやス。大坂おおさかの
 附木つけぎは七八分位ふちやんの中なか小皆こな切きて束たばて有りやス。それ
 と一いち把ばくくる人ひとも有り。二把に把ばくくる者ものも有りやス。万松まんそう
 今いま妙たななでで有りやス。子こ附木つけぎととふふのの訣けで有り
 や正。鶴人つる附木つけぎと配くる訣けの銀ぎん鷄けいさんさんの考かんへへか面おも
 白しろふふ有りやス。引越ひきこののつれ家いえと持目もちめ出いるることことで

御能噺三巻

十一



ありやすうら。人も喜ぶ糸なりやす。そこで附木と
配まきやす。硫黄りゅうわうと祝いわふといふらうら。至極しごくおもはるうら
の心ざらふといふれ中なかが。至極しごくおもはるうら
やす。江戸で脇わきうら物ものと貫ぬきやすと移うつり附木つけぎと入いり
やす。も矢張やっぢやう今の祝いわふといふ処ところうら出でてでうらや
正ただ。五松ごしょうなるかど面白おもしろい説せつでうらやす。千長せんぢやう銀鷄ぎんけい先
生の考くわがへも面白おもしろい。附木つけぎの説せつは今いま少すく深い
処ところうらと思おもえれやす。御大名ごだいめい形かたちまで清きよ普ふ請しんが透い出で

速すみお移徒うつりたのとき先まづ一番いちばん火ひと贈たまり二采にさい水みづ
と贈たまり。それうら段だんく小種こねくの品しなと贈たまるといふこと
でうらやすうら。附木つけぎと配くまるも今の火ひとわうらといふ
処ところうら。こので有ありやすめら。五松ごしょう面白おもしろい中なかうら
微こと請しんにうらうらやす。引越ひっこのとき近所きんじようら
附木つけぎと祝いわつてよとすのなう面白おもしろいやすか。引越ひっこ
方かたうら。向配むかひあへ火ひと贈たまてゆといふ訣わけあへいやす
め。千長せんぢやう面白おもしろいなるかどさうでうらやす。然しからう

街能噂三巻



いふと銀鷄さんの説も向を祝てよこすいその硫黄と
 いふことも面白やアが是も引越と方々迎所へ
 祝めといふも可笑やアやアやせんり。五松ソリヤア能
 々や正私も沖迎所へ引越すいそう皆さるよ祝
 なさしてさういふと祝でやアやア硫黄と
 いふとが聞えや正鶴人附木の説が大論となり
 中々なるやど引越の喜小迎所いそう附木と祝て
 られるのどと穩でりやアが手前いそう向へやアゆら

いふと硫黄といふ銀鷄さんの説も臍いそ落が仕やせん
 やうでやアやア子。五松ソリヤア善言いそやアやせん脇と
 物と貫いそうのり附木と入てやアやアも何寄な物
 とさういふと右いそうふやアはす。こハ麓末な
 品でやア外が移小態とおいとひやアやアといふ
 硫黄へかやアやア随分聞えやアやせん。鶴人さ
 やうと。それもやアやア江戸でやア引越小蕎麦
 と配るのいふと訣でりや正ぬ。十長アリや訣も

御能尊三巻

十七

四





大坂で張て置かやすが江戸で直す張をやすせん。
 車留の札も大さふちがいやすよ。[五松] 大坂で
 モシエライおんづとぢやなといふ言の盛どといふとど
 何うやすらぬ。[鶴人] さやうでやりやす。[手長] アラセイラク
 いま正といひやすいといふとどいふとどいふとどいふとどいふとど
 [八守] 數金といふとどいふとどいふとどいふとどいふとど
 書やすが。ソレぢやア。分りやせん。[五松] なるかど守數金
 でらりや正。何う物とさがて貫かとと頼やすとき

小せんま致しま正といひやすらう。[守] 數金でらりやらう
 や正。[手長] 江戸で何う致しま正といひやすらうといふとどいふとどいふとどいふとど
 スツウウナといひやすらぬ。[手長] 江戸でてんづけごの
 つつけごのといふ如と大坂でいふとどいふとどいふとどいふとどいふとど
 さやうく。さやういひやす。[鶴人] 脇他行すらうといふとど
 何方へおではりてらり弁といひやす。まりけ餘計。
 なやうでらりやすが。サシスセソの五音でまりのますと
 いふとど何方へお出ならうはすと聞てらりやす。

街能噂三卷

三十一

往台の三巻

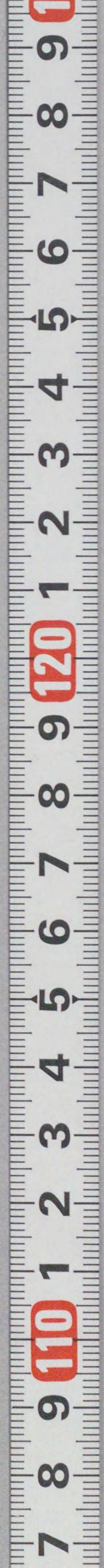
千長いりてぬ面白言でたりやス。鶴入江戸で一処小
行ふといひやスと大坂で連つて行ふといひやス。
又危様といふ処とさうと詰つといひやス。うつ
ちやつておけといふとホツテオケといひやス。江戸の
うつちやつておけいお捨く置大坂のホツテ
オケ放下為て置といふのでりやス。万松大坂
の者ハ言の終へさういといふまといひやスがどふ
つ訣でりや正。鶴入さやうとさういといふ

ふいさういといひやすがアリやアどふいふとてり
や正。千長イヤ附んとてりやア此間天満の天神へ往
やいさう。境内で子供が獨樂と廻して居ると
見申さう。貝のこほでりやアガ。アリやどふいふ廻
りこととるのぞりやス。替して側小商人がこほと
賣つて居申さう。誠小綺麗小飴つて置やス
む。万松さやうと替しておつなとと志やすやス。相
の中へ此完筵と敷て中と穴注其中へこほと廻

街能噂三巻

三十一

〇



御能尊三卷

ヤスがどよまするので何りヤス子。**鶴人**アリヤアあれで勝負
とどろのどろりヤス。アノ窪くぼ中なかへはと廻まわトヤスと。又
跡あとろ一人其中へ廻まわトヤス。其ここで。あつみのこはが
皆みなな穴くぼ窪くぼど処あち小居こゐヤス。是こはとこはとが
當あり合あハス。其時射や出でされと。はがまけふたりや
して。向むかへ其こはと取とりるので何りヤス。アノ貝かいへ唄うたと
いふ貝かいで何りヤス。江戸で番ばん太た郎らうで賣うヤス子供こどもの
廻まわすべしと云いふと云いふつ。此地こちの唄うたはうらと出でと云い

どろりヤ正唄せいとベイと江戸を何りていふので何りヤス。
其こはとどろり形かたちと河か野の見みトヤ。唄うたはの通とり木きで
指さへこのを何りヤス。千長せんたるかどさうで何りヤ正唄せいは
糸いとで廻まわすやうすむ何りヤス。江戸のベイとこは
棒ぼうの先さきへ革かわとつけろ。切きとつけろ。あでこは
と云いいて廻まわトヤス。鶴人つると云いう。横よこの方かた
うらあきさやす。**万松**女房にようばうの仕し事じと云いて。まて面白おもしろお
鉢はち箱ばこで何りヤス子。大坂おおさかのいこ人を加かうで何りヤス

御能尊三卷

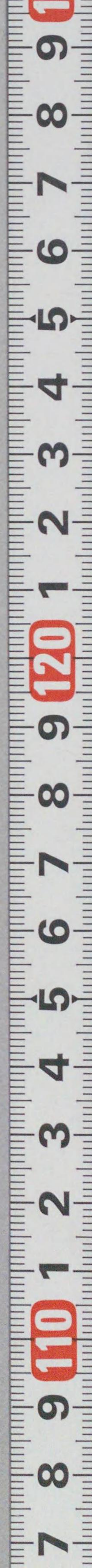
三三

うね。鶴人つるびとさやうさ。大抵おほよそ此通このとほりせりやスモ江戸
のとい大らぐひせりや正千長まさちながより面白おもしろ製衣せいい作ど
りやス。万松まんしょうさん歸かへり小土産こつちさん小買こかひつて往ゆや正せぬ。
好事家こうじけへらちつけでやうやス。万松まんしょうようやうや正。
多おほモ世間見よこしまけ中ちゆう。竹たけの筒つつへ錐すい穴あなとあけ。
茶漉ちやくの穿うらでやうやスせぬ。鶴人つるびと江戸へのお土産おつちさん小
面白物おもしろものもやうやスが皆みなな運賃えんちんでかゝりまうけが
いさやす。万松まんしょうそれによそりやス。さうでやうや

せんせんとと瀬戸物類せとものるいなど小ちひおつち物ものも見みけ中ちゆうが
さそくおつちでやうやス。鶴人つるびと書物しよぶつの物もの小依よって江
戸えどより餘程よやぶり恰好かちごうな物ものがやうやス。こまの買かひつ
おつちでやうやス。長ながさうとつちでやうやス
う。どあぞ種いねく調しらふやうやス。万松まんしょうイヤ此間このまも
さびく繪屋えいゑで見みけやすが。モシ大坂おほさかの錦繪にしんゑ
も近年このとほの強氣かうき小能このうなりや中ちゆうとせぬ。江戸と
格別くくべつ今いまでい違ちがひぬ繪ゑが何程いづらもやうやスせぬ。鶴人つるびと

江戸道楽

三三三



さやうと。浮世うきよ繪師えいしの名大人ななびとが出来中できちゆうとさう。結むす
 構かまでやうやス。千長せんぢやう大坂おさかで何なんとつのが上手うまでやうや子こ
 鶴人つるびと似顔にがなと能書よみかきやスの國貞くにさだのこ子この歌川かがわ貞并さだなら
 とつのがやうやス。殊こと小成田屋おなりやの似顔にがなへ分わてき小
 入いと物ものでやうやス。又長山ながやま寄よのいでやうやスが柳齋やなぎざい
 重春ぢゆうしゆんとつのがあたらしく大坂おさか小居おぐやすが誠まことな
 とやうか画ゑど何でも出来できやス。笑わら天下あまのうなと心こころ小
 世よきる処ところとかさやす。其外そのほか小も春梅齋はるばるざい北英きたえい

菊川きくがわ竹溪たけせき。天満屋てんまんや國廣くにひろ數かずおかいとでやうやス
 今度こんど銀鷄ぎんけいさんの街まちのうまこの口くち画ゑと書かきやう
 歌川かがわ貞廣さだひろとつひやすのが。坊ぼくどせがらでやうやスが
 強氣かうきなとのでやうやス。実まこと小後世おごせ恐おそるべしと
 今いま小彫刺おぼり上うへつと御ご覧らんトヤ。万松まんしょうなるやど
 負廣おんひろとつひのと聞き中ちゆう。魁布かいは袋ふくろ所ところ小居おぐ人ひとと
 ちや正ただ鶴人つるびとさやうと能よどせんどと。其その人ひとでやう
 又また千長せんぢやうモ江戸えどの山下やまのした小居おぐ中ちゆうと歌川かがわ國鶴くにつるも



大坂へ来て居ゆがアウケリヤせん。鶴人つるびとこら小居こゝろリヤス。こハ餘よ程ほど腕うでがきつて居ヤスせん。五松ごしょうさうさ江戸でも評判ひやうばんがよろう中ちゆうと。千長せんぢやうイヤ評判ひやうばんといへば人小大坂おほおさかの祭まつりハ大壮おほぶちなとていふリヤせん。江戸でも評判ひやうばん仕ヤスせん。鶴人つるびと至いたて綺麗きれいかててちうヤス。是こゝハお目小めこかけふ。五松ごしょう今年ことしハウリヤせん。鶴人つるびとちうヤスとも。大坂ハ六月七月八月ろくがつしちがつはちがつの祭まつり月つきでウリヤス。當月とうげつハ早はや済すまや一ひとが来月らいげつを

はこウリヤス。千長せんぢやう此七月このしちがつハ何方どなたの祭まつりであり中ちゆうとね。鶴人つるびと十五じふご日ひが北野きたのの天神あまのつみの祭まつり。廿四にじゅうよ日ひが久太ひさた郎らう町の猿田さるだ彦ひこの祭まつり。同日どうじつ小地こぢ藏ざうの祭まつりもウリヤス。八月はちがつハ又また二日ふたひがさくひの天神あまのつみの祭まつり。九日くひがおかの天神あまのつみ十五じふご日ひが安土やすと町の八幡やっぺん。廿日にじふが安井やすゐ天神あまのつみ。廿二にじふに日ひが西にしの宮みや。廿三にじふさん日ひが伊丹いたん祭まつりでウリヤス。其外そのほか小も所ところ小ウリヤ正ただが先まづ八月はちがつハこんかとのでウリヤス。五松ごしょう大おほ壯ぶちな祭まつりの數かずでウリヤス。ソリヤ人ひと又また来月らいげつを

新記傳 三三三巻

三三五

街能傳三卷

樂でうりやすの。千長 いうさぬおびぬしぬまで

うりやす。鶴人 イヤ祭といへば此間友人の所より

南水漫遊といふ本と借やうとが。いちく面白

ことううりやす。其内小嶋の内の移り物の番附

の写しうりやすが。それ小づみておはなうがや

やす。今出してお目小うけや正。トのいながら本箱より

爰と讀で御覽トやし。千長 本とよハる寫本

でうりやす子。濱松主人といひやすの。いつ頃の人ぞ

うりやす子。鶴人 格別古くは無人でうりやす。作者の疑

と分りやせん。万松 濱松主人といふ大坂の戯場の

作者でうりやす。鶴人 さうしも知やせん。此内小も

芝居のところが大分うりやす。万松 此の囉子遠物といふ條

でうりやす。鶴人 さうしく其処と讀で御覽トやし。

千長 万松 本小じくふ

○囉子遠物 南水漫遊カニ三卷小出ると
今爰小鈔録す。

浪花の諸社水無月の神夏小。氏地の色里より遠物

街能傳三卷

三三三



或ハ囃子ト出シテ。祭禮の賑ヒトスル小廊中を
 最上ト。崎陽是小川ぎ。堀江坂町北の新地ハ郭中
 崎陽の上小立人と難シ。就中江南の地ハ歌舞妓
 役者の住所又妓婦。奇妓の化粧もかのづゝ妙
 手小至る。殊更遠物。囃子ト云々ト催す時ハ劇場
 の北車。ちろろと漆て日頃の艶色小百倍の美を
 示ス。衣將衣の物敷青ハ年々歳々趣向と新
 小すと云へども。往古ハ々鹿なるもの也。

未ノ年崎ノ内移りその番組

足曳びり

鳩こぶ山
 音はき山
 かみ山
 戸塚山
 久ら山

宇治川百
 鳩氏多
 岩中や山
 岩中や山
 岩中や山

圖ナラズ
 宝曆元未
 の年の鳴の
 内遠め
 番組あり
 半切ひら
 の々鹿紙
 かの移り物

丁三十四

丁

街能噂

三十五

社能尊三卷

二十七

鎌倉山

より田やなる

の内分十一

茶子山

系井筒や小光

小出る。伯母

阿さ山

ささや小系

捨山小天満

かろ山

中倉ら小隙

五の梅と

高小の山

桔梗や小滝

いつの娘婦。

石舟山

天満や梅

世時の溪

ささ山

天満やもん

せんとも。價

三龜山

ぬや小系

五両あそく

三橋山

大黒保岩

坂龜甲の

石山

系井やとよ

櫛と求ぬ。

熊の山

系井やいと

繁の緒

甲山

大寺やとよ

と〜〜

中川山

慶田やとよ

出たれば。

三か山

つらと活むた

外の遠子

妻日山

あやや長

は頼ひら。

待山

水りややんよ

花のかさ

新能尊三卷

三十八

本館蔵書

杉山

大長

深

大肉山

中

山本

八

柏

お

第根山

大九

緒

毛急の山

大伊

同

赤か山

さ

一

は

山

丈

ち

太鼓

さ
ま
り
彩
ち
り

梅
北
野

う 祿

ま
ま
り
彩
ち
り

の
天
神

三 弦

さ
ら
ら
や
い
と

笑
と
と
草

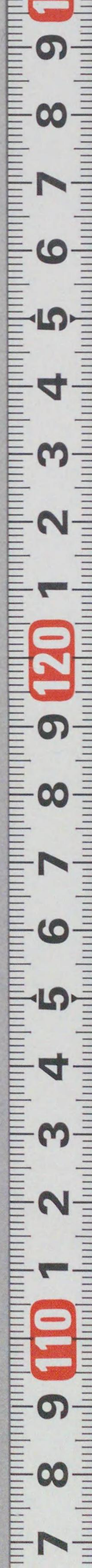
ま
ま
り
彩
ち
り

見
車
小

街能噂

三

三



竹由 三人

見送りおぼろ

梅が焙ち

かろ揃と

さしあ

と彼が名小

よせく梅

の花咲さといひなせし宝曆末年の

うふ七十季とるはといふも其頃の

卅哥おも思ひやべし。衣將衣の物

ても大抵これ小准すと老波女の物語也。

近頃飛脚歌小替うと数種あり。是迄原書の儘く

千長 かるかどこれの珍らし書と拜見いじやる。

鶴人 面白お喩といひやすめ其天満屋の梅が揃

のそでやえ僅五両で買つ揃が其時分小を大

評判で流行哥小迄諷こといひやす。今時へ五兩

位の揃いおさんごんごもやえ。宝曆元年の

天保五年迄僅八十四年小いら成やせん昔の

竹由 三人

三十一

作前町三々

質素の処と内覧じや。[万松] たるかど大著ぬ所の
ふたりや。[千長] 扱れど銀鶏さんが常くひやす
さ。京傳の骨董集や。馬琴の燕石雜誌。種彦
の還魂紙料。北村の瓦礫雜考。なととるふも
唯古物と集とをり思て見ての心げいど。昔の
質素と知せて。今日の驕と省ああの作者の
腹どといえれや。右が説でひたりやせん
鶴人 おかきふさうでたりや。りき感心ど。さういふ処

眼につけてるかと。滑稽書本と見てもあなかりや
せんや。蚊のうが消るさのいん。鶴人 どの
蚊が出くまをさや。[万松] 江戸よりハ蚊はすくたの
やうでたりやすぬ。鶴人 処小よりて大さ小らぐい
や。舟越町なとてハ蚊屋の釣やせん。[千長] さうで
たりやす。舟越町といふ村田嘉言先生の居る
処でたりや。江戸でも日本橋の呉服町辺ハ蚊さ小
蚊はすくたふたりや。鶴人 さういふこつてたりや。アリヤア

街能噂三之巻

三十一



柳屋で紅と絞る其灰汁が土腐へ流るるら
 蚊が涌ぬといふてでらうやすがたふかどさうらも知
 れやせん。[五松]イヤ蚊の多いといひ申さう。本所と
 下谷で何りや正暮方口の聞やせん。ふんぐと
 舞こことやせぬ。[千長]谷中も大壯で何りやせぬ。
 銀鷄先生の書齋なごらてん。毎度疲申
 ことふ。[鶴人]さやうく誠小蚊の多い処で何りやす。
 [五松]モシ夜見世へ順慶町と心齋橋筋をくりいで

りやスカ子[鶴人]いへく所く小何りやす。先天満十
 丁目助小。本町松屋町筋。日本橋筋。松屋町三
 井戸まみみげ道頓堀其外小も毎月一度
 立夜見世も又二三度宛まのも何りやす。毎月
 九日十日が天満の寺町小。十一玉十五日が造り
 稲北何。廿四日が浄茶湯地蔵。廿五日が天満の天
 神。一六の日が内平野町小立やす。何づく成り
 も何りやす。イヤ又時の太鼓が廻りやす。モウ四

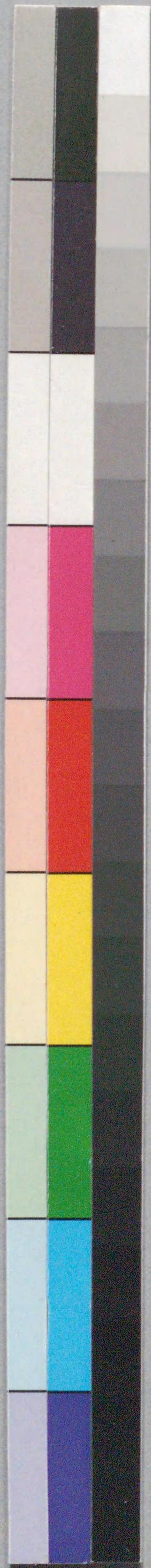
江戸



208
4
93

徒命四二考

見えやすお寐ねひふりや正。ユレカラハ蚊屋あやの
 正ただ。新あらとつつや正。方松かた。千長ち。モウ四よつ
 々つやす。引切ひきなり。小お新こや申ま。女中にま
 移うつひかららふ。鶴人つるととらら舟ふねととここで居あやす。
 女房に方かたホほくくさんさんやくやく。オおツつ起おて蚊屋あやを
 釣つんんううおお列いぶぶやくやく。
 街能あ噂ま卷ま之三終の



国立国会図書館 街能尊 4巻 208-93



ガラス使用

